

エチオピアから/レザー・ロードの旅/村篇 皮流通 の担い手を訪ねて(調査員レポート)

著者	児玉 由佳
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1998-09
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008408

調査員レポート エチオピアから

レザー・ロードの旅/ 村篇

皮流通の担い手を訪ねて

兎玉由佳

第1回目、2回目のレポートでは、羊皮と牛皮をそれぞれ取り上げ、皮の流通経路の全体像と、流通に関わってくる人々の段階ごとの役割について報告した。今回は、この流通の起点にあたる、皮を提供する農民とそれを買い取る末端の商人について報告したい。

前回までの報告で明らかになったように、皮(特に羊皮)の流通は、農民一村の小商人—大きな町の大商人—なめし皮工場といった経路をとっており、なめし皮工場を頂点としたピラミッド型になっている。その底辺にある農民と村の小商人との関係、小商人の皮流通における具体的な活動を理解することが、今回の調査の目的である。

筆者は、上記の目的のため、1998年4月から5月の2カ月間、アムハラ州の南ゴンダール・ゾーン(県レベルに相当)にあるジバスラ村で調査を行った。

この村を選択した理由は二つある。まず、南ゴンダール・ゾーンの中でジバスラ村の属するウステ・ワレダ(郡レベルに相当)は、ゾーン内での羊皮の産出量がワレダ・レベルでは2位と多く(1位はゾーン・オフィスのあるファルタ・ワレダ)、その中

でも特にこの村が皮の産出量が多いと商人から指摘されたこと。二つ目には、この村のように交通や通信手段が整備されていない場合、商人や農民が価格情報の入手や売買のタイミングをどのように判断しているのかを明らかにできると考えたからである。

また、調査時期は皮が多く出回るイースター(復活祭)の祝日と重なっていたため、活発な皮の売買活動が観察できた。

村のプロファイル

ジバスラ村は、ワレダ・オフィスのあるウステの町から徒歩で約3時間の場所にある。徒歩で1時間のところに幹線道路があり、バスに乗ることもできるが、料金が必要であり、ウステ行きのバスは時間が一定ではないので、ほとんどの住民は利用していない。村までの道は途中で二つ小さな川があるため、通常車は出入りせず、公共の交通機関はない。

人口は約2000人程度と言われているが、農民は少なく、農民たちが主として住んでいるのは、ジ

レザー・ロードの茶/村篇

バスラ村を取り囲むようにしてある五つの村である。これらの村を合わせてワレダより1段階下の行政区画にまとめられている。

ジバスラ村は、定期的に市が立っていた地域から自然発生的に生まれた村なので、週に一度土曜日に開かれる市に周辺の農民たちが集まってきて、穀物、家畜などを売り、日用雑貨を購入していく場所という趣が強い。

村の約3分の1の世帯を調査した結果では、男性の職業でもっとも多いのは仕立て屋であり、売る対象は農民たちである。女性の職業も、主として市の立つ日にやってくる農民対象の地ビール飲み屋が多い。農地で耕作に従事しているのは、調査対象者の約8%にすぎなかった。

エチオピアン・イースター

今回の調査期間中の4月19日はイースターにあたり、この時期は皮の供給が非常に多くなる。この項では、簡単にイースターについて説明しておく。

このワレダに住む人々の96%がエチオピア正教会の信者であり、人々の生活は正教会の教えと密接なつながりがある。その正教会の祝日の中でもっとも重要なものとして挙げられるのが、4月下

調査地域



旬のイースターである。正教会の大きな祝日の前には大抵、肉を絶つ「断食」の期間があり、イースターの前にも56日間の断食期間がある。したがって、祝日は「断食」の終わりを告げる意味もあり、各家庭で肉が振る舞われる。農村地帯では、イースターの日から1週間農作業を休み、あちらこちらの家庭で宴会が開かれる。

断食期間は一般の信者でも年間合計180日間に及び、それ以外の日でも肉食が毎日あるとは限らない。したがって、イースターなどの祝日には肉の消費量が急増し、それとともに皮の供給量も増加するのである。

ジバスラ村の皮商人たちのプロフィール

商人	免許	年齢	参入時期	他の仕事
A	あり	50	1970/71	農地賃貸
B	あり	41	1979/80	粉挽き小屋, 農地賃貸
C	あり	57	1994/95	農地耕作
D	あり	33	1992/93	仕立て屋, 粉挽き小屋, 無免許で穀物・食用油用豆類売買
E	あり	30	1995/96	仕立て屋
F	あり	23	1994/95	仕立て屋
G	なし	30後半	1995	仕立て屋, 喫茶店
H	なし	41	1991以降	町長, 農地耕作

(出所) 筆者作成。

皮商人たち

皮流通にたずさわる者は本来政府から免許を取得する必要があるが、この村に住む皮商人のうち、免許所持者は6名、無免許が2名である。彼らのうち6名が、新政権発足後の1991年以後に皮を扱い始めている。皮の売買と為替の自由化に伴って、皮の価格が、社会主義を標榜していた前政権時代の2～5ブルから15～25ブルへと上昇し、1枚当りの利益が増したことが新規参入の理由として挙げられる。

扱っている商品は羊皮とヤギ皮であり、牛皮は現地のなめし皮職人に高値で買い取られてしまうため扱っていない。

彼らのすべてが、皮売買とは別に職業を持っており、粉挽き小屋、仕立て屋、農地賃貸、穀物・食用油用豆類の売買などによって、安定した経済基盤を確保している。村での地位は比較的高く、周囲からは金持ちであるとみなされている。

出身地はジバスラもしくは近郊の農村であり、この地域に縁戚関係をもつ。

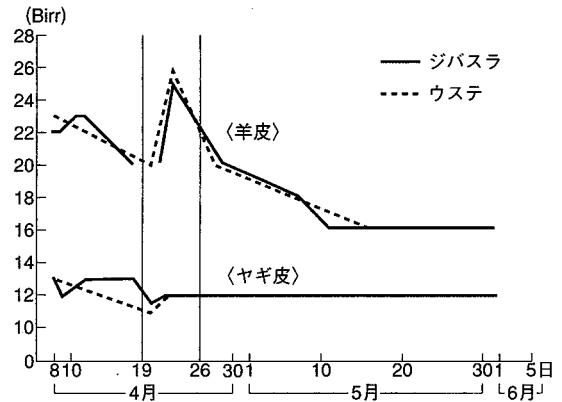
皮の売買

農民から村の皮商人へ

羊の価格が80～150ブル(1998年7月1日現在1ブル=20円)であることを考えると、20ブル前後になる皮の売買は、農民たちにとって決して無視できない問題である。

ジバスラ村の皮商人たちが皮を買うのは、主として市の立つ土曜日である。市のために村にやってきた農民たちから買い取っている。皮商人たちは市の中でも目に付くところにいるので、農民たちは容易に皮商人たちの買い取り価格が比較できる。

イースター前後の羊皮・ヤギ皮の買い取り価格の推移



(注) 4月19日から26日までが、イースターから始まり、次の日曜日に終わる祝日期間である。

(出所) 筆者作成。

したがって、結果的に村での皮の買い取り価格は同じになる。

また、かきいれ時のイースターや新年などの大きな祝日の頃の価格情報では、ラジオが大きな役割を果たす。大きな祝日の後の道端での皮の売買は、首都アディス・アベバでも一種の風物詩ともいえる光景である。ラジオのニュースは、アディス・アベバでは皮がいくらで売買されたかを必ず報道する。電気のない地域でも、乾電池で聞けるラジオの所持率はかなり高い。それによって、農民も皮商人たちも皮の価格の趨勢を把握するのである。

前述したように、農民たちは祝日のときに集中して肉を消費する。見方を変えると、その時以外にはあまり肉を消費せず、皮は供給されないということになる。したがって、商人たちは、イースターの時期に買えるだけ買って置いて、適当な時期に売却するため保存する。つまり、供給量が増える時期に購入側も大量に買い付けるため、価格の下落は起こらず、競争のために逆に上昇するのである(グラフ参照)。

村の皮商人から町の皮商人へ

村の皮商人たちがウステの町に住む大商人たちに皮を売りに行くのは、年に3、4回である。皮の供給の増える祝日(4月のイースター、9月のエチオピア暦の新年、1月のエチオピア暦のクリスマスなど)の後に、ロバなどを4、5頭借りて町へ運んでいく。

ただし、皮の価格の変動についての情報は、毎週のようにウステに行って収集している。したがって、グラフにあるように、ウステとジバスラ村では、農民からの買い取り価格の推移がほぼ同じになっている。

すべてのジバスラの皮商人が、ウステの商人へ皮を売っているにもかかわらず、双方の買い取り価格がほぼ等しいのは、大量に皮を持ち込む皮商人に対して、ウステの大商人が、農民からの買い取り価格に1枚当り50センチーム(1ブル=100センチーム)から1ブルほどを上乗せして買い取っているのが理由の一つとして挙げられる。また、それだけではなく、購入時期と売却時期のずれによって利益を得られるという投機的側面もある。つまり、同じ時期を見ると両者の農民からの買い取り価格は同じであるが、ジバスラの皮商人は、輸送費の関係もありまとめて運ぶことになるため、時期的にずれができる。したがって、ウステの皮商人への売却価格は、皮を買い取った時の価格ではなく売却時の価格になる。国際価格の変動によって利潤が変わるため、たとえ同じ価格で購入していても、損失の可能性もあるが、利益を得る可能性もあるのである。

なお、ジバスラ村における皮の輸送手段はラバであり、1頭当り80枚運べ、1回当り2頭から5頭を借りる。借り賃は1頭10ブルなので、輸送費は1枚当り13センチームとなる。

イースター前後の価格の推移

次に、皮の供給がピークに達するイースター前後の皮の価格の推移を追ってみたい。

前述したように、イースターが商人たちにとっても皮を多量に購入する数少ない機会であるため、激しい競争が起こり、皮の価格はイースター前の20ブルから、ウステでは26ブル、ジバスラ村では25ブルまで急騰している。この価格は、その当りなめし皮工場が買い取ってくれる国際価格をベースにしたものではなく、投機的な思惑の絡んだものであるといえる。したがって、この高騰の反動で、中央のなめし皮工場の情報が入ってきたイースター後は16ブルまで価格が急落している。

その一方で、中央のなめし皮工場と緊密に連絡を取り合っている州都バハルダルの皮商人は、イースター後も16ブルまで下落することなく、18ブルの買い取り価格を維持しており、ウステ・ワレダの地域では、必要以上の価格高騰・下落が起きたことを示唆している。

なぜ、このような価格の乱高下がおきたのだろうか。本来、各流通段階の皮の買い取り価格は、輸出の際の国際価格から流通コストや利潤などを考慮した上で逆算によって、決められる。つまり、ピラミッド型の流通経路の頂点で価格が決定され、底辺にある村での皮の需給は、最終的な買い取り価格には影響を及ぼせないはずである。このような価格の制約は、以前皮商人たちにインタビューをした時には、明らかに商人たちに認識されており、それを無視して売買を行えば、利益を期待できないことは明らかだったはずである。

しかし、このイースター時期の価格変動は、このような価格の制約を無視した形で起きている。その理由として、以下の三つを挙げるができる。

まず、第1の理由は、羊皮の国際価格の乱高下を背景にした、商人たちの皮に対する投機的な動きである。2、3カ月前には27ブルまで価格が上昇していることを考えると、羊皮は3、4カ月は保存できるので、値上がりを待つこともできる。そのためには、大量に皮が供給されるイースターの時期にできるだけ買いとることが必要となり、現在の国際価格を無視した価格になったといえる。

第2の理由として挙げられるのが、価格情報の不足である。ウステとジバスラには即座に情報収集できる電話などの通信手段がない(ウステでは5月中旬より電話局が活動再開)。価格情報を知るためになめし皮工場に電話をかけるためには、バスに乗って3時間ほど先にある他の町に行かなければならない。月単位で価格を修正し利益を確保するための情報は入手できるが、イースターのような1週間程度の短い時期に、どこまで購入価格が上げられるかを即断するには、判断材料が非常に少ない。ラジオでの価格の報道があってもそれはあくまで参考程度の情報である。今までの価格の乱高下と情報不足とあいまって、商人たちはリスクを冒し、行き過ぎた高騰を招いたといえる。

第3の理由としては、先述したように、皮商人たちは皮売買とは別に安定した経済基盤があるため、多少のリスクを冒しても価格の高騰または下落を予測しつつ、投機的に皮売買を行なえるということが挙げられる。羊皮だけでなく、価格が安定しているヤギ皮を扱うことも、安定した利益を

確保して、羊皮売買によるリスクを軽減させているといえよう。



おわりに

今回の調査で、どのように村の商人たちが農民から皮を買い取り、町の大商人に売っているのが明らかになった。まず、農民たちにとっては、各村にいる商人たちは、自分たちがわざわざ町に出向くことなく妥当な価格で買い取ってくれるという役割を果たしていた。農民たちがウステの町とジバスラ村の価格を比較することができるために、農民たちからの買い取り価格を同じにし、村の商人たちには上乘せ価格を支払うことで、大商人たちは皮を買い取るためのネットワークを広げていた。

その一方で、イースター時に起きた国際価格とは無関係の価格高騰から、羊皮のもつ投機的性格も明示された。商人たちはできる範囲の情報収集を行なってはいるが、それはあくまで限られた枠内にしかすぎない。したがって、羊皮売買にはリスクがつきまとうため、安定した経済基盤のある者にしか参入はできない。

次回は、新政権発足後皮商人の数が急増したことを受けて、皮商人やなめし皮工場などに対する政府の政策の歴史的な変遷について報告する。

(こだま・ゆか/在アディス・アベバ海外派遣員)